

2024年 5月 1日

2023年度 総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 ※該当する()に ○を付ける	・共同研究 () ・個人研究 (○)	
研究代表者 (所属・職・氏名)	看護学部・助教・岡島 志野	
研究課題名	看護師の道徳的行動を起こす moral strength の概念統合に関する研究	
研究分担者氏名	所属・職	役割分担
研究期間	2023年4月1日 ～ 2024年3月31日	

研究実績の概要 (1)	
I. 研究背景・目的	<p>日本の看護をめぐる環境は、急速な少子高齢化の進展、疾病構造の変化や医療技術の進歩など大きく変化しており、様な道徳的課題が生じる可能性をはらんでいる。看護師は、対象となる人々の擁護者として、このような場面に遭遇した際には主体的に対応していくことが求められる。しかし、看護師における問題点として、道徳的課題に気づき、道徳的判断に至りながらも、周囲の人々との関係性や自分自身の消極的感情、専門職意識の不十分さなどが障壁となり、道徳的行動を起こすことが困難な場合がある。つまり、道徳的判断と道徳的行動の隔たり（ギャップ）が生じている。このような隔たりをつなぐ個人の要素として moral strength（道徳的強さ）があり、意志や意欲を主体とした幅広い概念であるといわれているが、これまで看護学においては殆ど明らかにされてこなかった。</p> <p>研究代表者はこれまでに、各分野の専門看護師（Certified Nurse Specialist）等に対しインタビュー調査を実施し、看護師の道徳的行動を起こす moral strength を構成する要素と要素間の関係性を明らかにした（岡島, 習田, 2023）。しかし、CNS というエキスパートナースからの知見であったため、看護師としての臨床経験や職場内の立場の違いによって異なる moral strength の要素が抽出される可能性も考えられた。</p> <p>そこで、本研究では、これまでに明らかになった看護師の moral strength を構成する要素と要素間の関係性について、ジェネラリストナースにも同様に当てはまるのか探求することを目的とする。将来的には、さらにさまざまな看護師（新人など）からデータを収集し、看護師の moral strength という概念の確立（概念統合）を目指す。本研究を含む一連の研究により、看護師の倫理的行動の促進に貢献する学術的知見を得られることが研究の意義である。</p>

研究実績の概要（２）

I. 研究デザイン

インタビュー調査を用いた質的帰納的研究デザイン

II. 研究方法

さまざまな部署で従事しているジェネラリストナース（特定の専門あるいは看護分野にかかわらず、どのような対象者に対しても経験と継続教育によって習得した多くの暗黙知に基づき、その場に応じた知識・技術・能力を発揮できる者）計 7 名を便宜的選出し、半構成的面接法を用いたインタビュー調査を実施した。データは質的帰納的に分析し、まず個々のエピソードごとにカテゴリー化を実施した。その上でエピソード間の比較検討を行い、カテゴリーの統合、抽象化を経て統合カテゴリーを抽出した。最終的に、各統合カテゴリーの特性を比較検討し、統合カテゴリー間の関係性を示した。

なお、本研究は共立女子大学・共立女子短期大学研究倫理審査委員会の承認（KWU-IRBA#23001）を受けて実施した。

III. 結果・考察

参加者から語られたエピソードに内包された道徳的課題は、身体抑制や排泄ケアに関連するもの、自律性の担保が困難な患者への延命治療、患者の症状に応じた治療方針などであった。

今回の参加者の語りからは、これまでに研究代表者が明らかにした看護師の **moral strength** の要素である、＜患者中心の考え方＞、＜道徳的な姿勢＞、＜道徳的な応答＞のいずれも含まれていると考えられた。しかし、その語られ方としては、【自分の信念を貫き周囲に屈しない】、【一步を踏み出す勇気がある】といった強いエネルギーを伴う“型破り”をするというよりは、周囲の人々に相談や説明をして理解を得ながら、患者のために自ら動く、という日常的なケアの延長線上で行われていた。

また、参加者の捉え方としても、組織のあり方や慣例そのものへの改革意識というよりは、自身が向き合っている患者に対するより善いケアの一環として認識されていた。ただし、参加者自身には意識されていなかったものの、問題に対し取り組めるチャンスを見逃さずに行動に移したことや、目的を達成するために知恵を絞って様々な手段を講じたことが語られ、【自分の職責を果たす】、【ひたむきに取り組む根気がある】といった要素がしっかりと存在していた。

エキスパートナースとジェネラリストナースの語りを比較して、組織の中での立場や役割意識の違いや、目の前の患者一人ひとりに向き合っていくか、より大きな規模でケアの質を考えるかといった個人の視点や関心の方向性が関連していることが推測された。今後は、**moral strength** の要素や構造について、汎用性を高められる表現を考えると共に、さまざまな立場や役割の看護師が“自分にも当てはまる、自分はここが伸ばせそう”と思えるような概念の洗練、統合化をしていく必要がある。

研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書

研究成果は、関連学会での発表と学術雑誌への投稿を予定している。